



●7月9、10日、メルパルクホール

「第43回現代舞踊展」

舞踊 評

身体は弾ける音と重なって躍動し、メロディーと溶け合って思いを伝える。

今年、今年の現代舞踊展は振付家の創意をしっかりとらえたダンサーたちが、群舞ならではのダイナミズムを發揮。秀作はいくつもあ
るが、まず、二見一幸の「カントオスティナート」はミニマルな音楽とともに十七人が間断なく踊り続け、ダンスそのものの楽しさ

創意とらえ 力強さ發揮

を開示した。

米沢麻佑子のソロと群舞六人を巧みに対比させて他者とのコミュニケーションの難しさを描いたのは、本間祥公と山口華子の「Words fail me」。後半、米沢が圧倒的な集中力で心の混乱を体現してひきつけた。鈴木泰介と贅田麗帆が振り付けた「昊」写真Ⅱでは変化する夏の空の下、十六人が繰り広げるデュエットや群舞の動きがゆったりと流れる時間を感じさせて心地良い。天空を指向して腕を伸ばすダンサーたちが生を肯定するように共鳴し、すがすがしさを放っていた。

平多実千子作の「あの日から」の「あの日」とは12・8（日本軍の真珠湾攻撃）から始まり3・11（東日本大震災）、4・14（熊本地震）などを表す。白い衣装のダンサー一人と黒い衣装の十一人を対照し、鎮魂の思いとともに生きる意志が静かに伝わった。折田克子作の「間奏曲―笑えぬ月―」では、大きな輪を手にした出演者が月の女神さながら、進行を司り見守る。結集したダンサーたちは明るさと陰影を併せ持った動きを展開。みなぎるエネルギーと祝祭性を感じさせた。

（林愛子＝舞踊評論家）